

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

五章 テキストの分析にむけて



コパンの紋章文字

一九六〇年に証明される

マヤの碑文に歴史が刻まれていることについては、これまで再三にわたりふれてきた。マヤ文字の解読史は百年以上におよぶので、そのあいだにはもちろん、マヤの碑文に歴史が刻まれているとする説はなかだされてきた。しかし、それが証明されたのは一九六〇年になってからである。それに先だつ数十年は、マヤの碑文には暦や天文に関することしか記されていないという意見に支配されていた。

「時の果てしない流れはマヤ宗教における最高の謎であり、その主題は、マヤの思想を人類の歴史のなかでも比類なき高みに押しあげた。時の広漠さに比べれば、個人の誕生、結婚、即位などの記録はまったくとるに足らぬものである」

このような意見がマヤ学界を支配していた。だから、歴史的イベントや個人の偉業などが記録されていないとは、考えもつかなかったのである。

しかしそれは無理からぬことであった。碑文は暦に関する文字であふれていたし、絵文書には金星や月の周期が計算されていた。石碑は五年、一〇年、二〇年ごとに、いいかえれば、果てなく流れゆく時の区切りを記すために、時の里程標として建てられていた。

たしかに石碑のほとんどは、カトゥンの終りという区切りのいい日に奉納されている。しかし、

碑文のなかにはそうでない、いわば区切りの悪い日のものもたくさんある。もしそれらが天文学的に意義のある日だとしたら、多くの場所でおなじことが記されているにちがいない。実際はどうか。二つの遺跡でおなじ日付が記されていることはほとんどない。三つの遺跡でおなじ区切りの悪い日を記している例はわずかに一例しかみつかっていないのである。

テキストが歴史上の事柄を扱っているのなら、各遺跡ごとに異なるのが当然である。その当然である事実は無視され、視点はただ暦や天文学のことだけにそそがれていた。

暦や天文学以外のこと記されているとか、もつとはっきり歴史が刻まれているという主張は、マヤ学界では異端であった。その異端であった説が正当とみられるようになったのは、ハインリッヒ・ベルリンやタティアナ・プロスクリアコフらの重大な発見がなされてからである。その重大な発見とは、手短にいえば、紋章文字の発見と、王の誕生や即位などの歴史的事柄が記されていることの発見である。

歴史が碑文に刻まれていることはもはや疑いようがない。だが歴史的解釈にはまだまだ問題が多いし、理解できない文字もたくさん残されたままである。そこで、ベルリンとプロスクリアコフの二人の発見について述べたあと、どうしたらテキストが分析できるのか、分析の手がかりとなる文字にはいったいどんなものがあるのかを述べよう。そして最後にそれらを利用して、私たちも実際にテキストを検討してみることにしよう。

「曆に關しない文字の理解をはばんでいる壁」と自ら語るその壁を、最初に打ち破つたのは、ハインリッヒ・ベルリンであった。一九五八年、彼は、各都市には、おなじ接字をもつが主字は都市ごとに異なる、その都市特有の文字があることを発見した。その文字は都市の名を表わすのか、その町の守護神なのか、王朝の名を表わすのかはつきりわからなかったので、ベルリンはそれを紋章文字と名づけた。これだけでは紋章文字がどのようなようにして発見されたのかわからないであろうし、テキストの歴史的解釈にその文字がどのような貢献をしたかもわからないので、ベルリンがたどった道を私たちもたどってみることにしよう。

紋章文字の発見

一九五二年、メキシコの学者アルベルト・ルスは、一九四九年から発掘をつづけていたパレンケの「碑文の神殿」下に、墓を発見した。それまでは、マヤのピラミッドは神殿であり、墓があるとは思われていなかった。しかしこの発見で、マヤにもエジプトのピラミッドとおなじような建物があることがわかったのである。

ピラミッドのなかには墓をもたないものもあるが、その後の発掘で、ピラミッドの多くはパレンケの「碑文の神殿」とおなじように、下部に墓をもつことがわかった。十六世紀の文献によると、インディオたちは死者を自分たちの住んでいる家の下に埋葬したという。後古典期の遺跡の



図59 パレンケ「碑文の神殿」の石棺東側 (A. Ruz 画)

マヤパンでも、家の下に墓があった。建物の下に死者を埋葬するのは、形成期からスペイン人征服後までつづいたマヤ人の習慣だったのである。

それまでの定説をくずす衝撃的発見で、パレンケの「碑文の神殿」は一躍有名になったが、その「碑文の神殿」下の石棺の四側面には、一〇人の半身像と、その人物に関係する文字がそれぞれ二文字ずつ（ただし東西壁の中央の人物には四文字）刻まれていた。ベルリンはその石棺の四つの側面を研究しているとき、一〇人の半身像に関係する文字の最後の文字は、おなじ構造で、しかもその多くはおなじ主字から成り立っていることに気づいた。そこでティカルやコパンやヤシュチランなどのほかの都市の碑文にもおなじような文字があるか調べてみたところ、たしかにそれはあった。ただし主字がパレンケのものとは異なっていた。

図59はベルリンが研究していた石棺の四つの側面のうちの東側の面である。それぞれの人物の横に二文字ずつ、その人物に関係する文字がある。二文字のうち上の文字はそれぞれ異なっているが、下の文字はおなじ文字の少しばかり変化したものである。ただし、まん中の人物に関する文字は、その人物の左右に二文字ずつある。その中央の人物の左側の二文字は、左



ティカル石碑16



ナランホ石碑23

図60

右の人物についている二文字の上のほうの文字にあたり、右側の二文字は、下のほうの文字を二つに分けて表わしているとみることができる。

これらの人物は、石棺に埋葬されていた人物に関係ある人々であることは、まちがいない。そうすると、これらの人物は、埋葬されていた人物の先祖、または親類・縁者と考えられるので、各人物に付随する最初の文字は、その人物の名を表わし、あとのほうの各人物に共通する文字は、彼らの出身地パレンケの地を表わすと推測できる。

この推測が妥当かどうかみよるためには、そのほかの都市の碑文を検討してみればよい。たとえばティカルの石碑をみてみよう。図60の上の文字群は石碑16の碑文の一部である。最後の文字は、パレンケの石棺でみた文字と同じ接字が使われている。大きく違うのは主字である。図60のナランホの石碑23をみてもおなじである。

これらの文字は、それぞれの都市にもっぱら生起するだけである。それゆえ、その都市の名や王朝の名など、その都市特有の文字とみることができる。そこで、いまだにはっきりとはわかっていないものの、都市の名とみて不都合はないので、ここではティカルとかパレンケとか、現在

つけられている遺跡の名と同等のものともておくことにしよう。

では、これらのいわゆる紋章文字の前に生起する文字は、パレンケの石棺のところで推測したように、ほんとうに人物の名前を表わすのだろうか。たしかに例にあげたティカルやナランホの場合でも、そのようにみてなら問題はない。ティカルやナランホの紋章文字の前の文字は、それぞれA王と「ひげリス王」の名なのである。

このようにしてベルリンは、紋章文字を発見したのであった。そしていま述べたことでわかるように、紋章文字が発見されたおかげで、それを手がかりに、人物の名を表わす文字まで発見できるようになったのである。

紋章文字はテキストを分析する上でひじょうに役に立つので、どういう構成をしているかをしっかりと定義しておこう。紋章文字は三つの構成素から成り立っている。

- (1) ペンニッチ接頭字 T168 (図61)
- (2) 水グループと呼ばれている接字群 T32とT41 (図62)
- (3) 主字

この三つあげた条件を満たさなければ、紋章文字の発見は困難である。それほどこの三つは必要な条件であるが、いったん発見できて(3)の主字がわかれば、(1)や(2)の欠けたものでも同定は十分可能になる。たとえば、女性を表わす接字(T1000F)に(3)の主字がついたものは、その主



T168

図61 ペン=イッチ接頭字



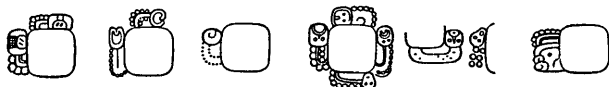
T32

T33

T34

T35

T36



T37

T38

T39

T40

T41

図62 水グループ

字が表わす都市（出身）の女性となる。

紋章文字は、ベルリンが予想したとおり、碑文の新しい解釈の突破口となった。彼はこう書いている。

「紋章文字を利用することで、曆に閑しない文字の理解をはばんでいる壁を打ち砕くことは、おおいにありうることと思われる。そうでない場合でも、少なくとも地理的研究の道を開くことができると思われる」

彼の発見した紋章文字は、テキストに歴史が刻まれていることを直接証明することはできなかったが、名前を表わす文字の発見に役立つことがわかった。紋章文字の前に生起する文字は歴史上の人物の名であった。そればかりでない。ベルリンがいったように、紋章文字は地理的研究の道を開くことにもなった。すなわち、紋章文字の分布の研究により、各都市間の関係がわかるようになったのである。

紋章文字をもっている都市は、彫刻石碑をもつ二〇

○ほどあるマヤの都市のうち、約二〇ほどに限られる。そして遺跡の規模が大きく、重要な都市だったと思われるところでは、紋章文字の生起数が高い。その生起数の高い都市のうちでも、ティカルやパレンケやヤシュチランなどの都市では、二つ以上の紋章文字があり、また、ひじょうに早い時期から紋章文字が出現している。たとえばティカルでは、マヤの最初の石碑でもある石碑29の人物像が彫られている前面にすでにみられる。

紋章文字をもつ都市は、政治的にも経済的にも重要な都市だったと考えられるが、このように、二つ以上の紋章文字を所有し、しかも生起度数の高い都市は、それ以上に重要な都市だったと考えることができる。つまり、都市のあいだに階層性があったことは、遺跡の規模や出土品の質量からばかりでなく、紋章文字からも推測できるのである。

ティカル



ナランホ



ヤシュチラン



ピエドラス・ネグラス



パレンケ



コパン



セイバル



カラクムル(?)



モトウル・デ・サン・ホセ(?)



図63 紋章文字

紋章文字はその都市内で使用されるのがふつうであるが、ほかの都市でも使われることがある。たとえばティカルの紋章文字は、ナランホやヤシュチランやコパンなどに現われる。この現われ方も、各都市間に階層性があったことを示唆していて興味深い。たとえばナランホのように、ティカルに近くて、ティカルより小さな遺跡では、ティカルの紋章文字がナランホに現われるだけで、ナランホの紋章文字はティカルではみられない。ティカルの紋章文字は女性を表わす文字について生起するので、ティカルからナランホへ女性が降嫁したとみることができる。これに対し、コパンに現われるティカルの紋章文字は、のちにみるように違った現われ方をしている。

このように、紋章文字は、紋章文字をもつ都市とその紋章文字が生起する都市との関係、たとえば、支配―従属、婚姻、同盟などを示す役割も果たす。

コパンの石碑Aとセイバルの石碑10には、四つの紋章文字が東西南北の四つの方角を示す文字とともに生起している。七三一年の建立とみられるコパンの石碑Aには、コパン、ティカル、カラクムル(?)、パレンケの紋章文字が、それぞれ東、西、南、北の文字とともに生起している。八四九年の年を刻むセイバルの石碑10では、セイバル、ティカル、カラクムル(?)、モトゥル・デ・サン・ホセ(?)の紋章文字が、これも東、西、南、北の文字とともに生起している。これらほもしかしたら、七三一年頃と八四九年頃のマヤ世界の東西南北の四つの首都を記したものであるかもしれない。もしそうなら、マヤ人は自分たちの地を、彼らの思想どおり、実際に四つに

分け、それぞれの中心地を記していたとみることができ。

ともあれ私たちは、その都市特有の文字である紋章文字を知ったおかげで、各都市間の関係が推測できるようになったばかりでなく、歴史上の人物の同定まで、それをたよりにできるようになったのである。

碑文にかくされていた歴史

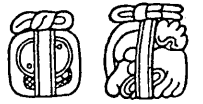
プロスクリアコフは、ピエドラス・ネグラスの碑文を研究し、一九六〇年に従来の説をくつがえす説を発表した。碑文は支配者の歴史を刻んだものである、というその結論は、次のような分析から得られた。

(1) 五年ごとに建てられている石碑は、七つのシリーズに分割できる。

(2) 七つのシリーズのうち、四つのシリーズのそれぞれ最初の石碑には、特別なテーマが刻まれている。高いところに設けられた、天体を表わす記号の帯で囲まれた台座に人が坐っている図である。その高いところにしつらえられた台座には、梯子がかけられ、そのまん中の帯状部分には、下から上へ向かって人の足跡がついている(石碑25、6、11、14)。それは、王座に昇ったということとを視覚的に表わそうとしたくふうのようにみえる。これを彼女は即位のモチーフと名づけた。おなじようなモチーフは、石碑33にもみられ、合計五つのシリーズで即位のモチーフが刻まれて

T 684

1 即位文字



T 644



2 誕生文字



T 740

図64

プロスクリアコフは就任日と名づけた。これは現在では即位の日とみなされている。この日付には、いわゆる「歯痛の文字 (T 684)」(図64の1) がつづく。この文字は、したがって即位を表わす文字である。

(4) 即位日より前の日付があり、「上向きガエル (T 740)」とあだ名された文字と関係している (シリーズ2、3、4、7)。その日付は、シリーズ中で一番古い日付で、プロスクリアコフは、それを開始日 (イニシャル・デイト) と名づけた。この日は誕生日で、「上向きガエル」はポックと読まれることまで、現在ではわかっている (図64の2)。

以上の分析から得られた年数は、表5のようになる。

いた。

(3) 即位のモチーフを刻んだ各シリーズ最初の石碑は、建立の日付ばかりでなく、それより古い日付をもっている。その日付は、前のシリーズ最後の日付と、そのシリーズ最初の石碑の建立日とのあいだ (石碑は五年ごとに建てられているので、五年間) にはいり、そのシリーズ中で繰り返し言及される。しかし次のシリーズがはじまると、もはや言及されることはなくなる。これを

シリーズ	誕生日から即位日 (即位年齢)	誕生日から次の シリーズの即位日 (寿命)	即位日から次の シリーズの即位日 (在位年数)	誕生日から次の シリーズの誕生日 (王と次王の年齢差)
1	?	?	1・15・16・13 (35年強)	
2	13・1・8 (12年強)	3・1・9・0 (60年強)	2・8・7・12 (47年強)	
3	1・2・5・19 (22年強)	3・5・14・11 (64年強)	2・3・8・12 (42年強)	1・19・3・1 (38年強)
4	1・8・6・18 (28年弱)	2・17・2・6 (56年強)	1・8・13・8 (28年強)	1・17・7・13 (36年強)
5	?	?	5・11・17 (5年強)	
6	?	?	17・16・16 (17年強)	
7	1・11・10・17 (31年強)	?	?	

表5

誕生日から即位日までの年数は、一、二、二二、二八、三一年となる。もちろんこれは、王が即位した年齢と考えることができる。

誕生日から次のシリーズの王の即位日までの年数は、六〇、六四、五六年となる。これは王の寿命に相当すると考えてよい。

即位日から次のシリーズの即位日までの年数は、三五、四七、四二、二八、五、一七年である。これは王の在位年数とみなせる。

王と次の王の年齢差は、三八年と三六年が得られた。親から長子への相続ではないことを示唆する数字である。いずれも、王朝の歴史が刻まれてい

るといふ假定を裏づけるに十分な数字である。

T740とT684の次には、それぞれのシリーズで決まった文字がつづく。これは、ほとんどの場合、そのあとに紋章文字がつづくので、王の名とみることができ。

プロスクリアコフはこうして、マヤの碑文に歴史が刻まれていることを証明した。彼女の解読技法を簡単にいうと、次のようになる。

それまで日付について研究した人はたくさんいた。碑に刻まれているテーマや図象を研究した人もいた。テキストの同似構造に注目して、テキストを分析した人もいた。しかしそれらの個々の分析方法を総合してテキストを分析した人はいなかった。その最初の人がプロスクリアコフといふことができる。彼女は、文字の生起の仕方を、それに付随する場面と、豊富に記されている日付とに結びつけて考察した。だからこそ重大な発見をなしたのであった。

プロスクリアコフは、即位の文字と誕生の文字をもとに、七人の王の文字、女性を表わす文字、女性の名を表わす文字などをみだし、ピエドラス・ネグラスの王朝を再構成したばかりでなく、ナランホやティカルやヤシュチランなどの遺跡の碑文も検討し、同様な使用例を発見し、自己の説を立証することができた。

テキストを分析する指標となりうる文字には、いまみた誕生の文字や即位の文字のほかに、征服や死を表わす文字、女性を表わす文字、結婚を表わす文字などがみつかっている。これらはテ

キストを分析する上で役に立つ文字であるが、そのほとんどはプロスクリアコフによってみつげられたものである。一九六〇年からはじまる碑文の歴史的解釈の枠組は、プロスクリアコフ一人によって作られたといっても過言でない。

即位の文字

そこで、実際のテキストを分析していく前に、テキストを分析する際の指標となるこれらの文字をまずみてみることにしよう。

先に誕生文字と即位文字をみた。両者とも特徴ある文字であり、「読み」が期待できる。誕生文字の読み方については二章でふれたので、即位文字の読み方について考えてみよう。

即位を表わす文字 T 6 8 4 は、鳥または月 (20) の文字に、ちょうど歯が痛いとき湿布をするような感じで、ひもがかけてられて結ばれている。それでトンプソンにより「歯痛の文字」のあだ名がつけられたのであるが、この文字にも、ひもが結ばれていること、結ばれているもの、即位に関係する文字であること、その文字が生起する場面、といったようなことを手がかりに、音価を与えようとする努力がなされてきた。

これまで多くの学者が賛成してきた読み方は、ホック (Hok ~ hok') であった。Hok には「据える」「hok'」には「出る。離れる。結ぶ」の意味があるからだ。しかし、鳥または月 (20) をゆわ

えたこの文字を十分にいい表わしているとは思えず、適切な読み方ということではできない。

しかし最近、それに換わる有力な読み方として、ペッツ (petz) が提出された。ペッツには、「動物を捕えるわな。そうして捕えられた動物」という意味のほかに、「他人のものをとる。村や町を支配する。所有地を奪う。征服する」とか、「酒袋をしぼませるように、手を重ねて置きながらしめつける」とか、「ある人を高職につかせる」とか、「少年と少女をある年齢に達したら結婚させるとりきめをする」とかいった意味がある。

「歯痛の文字」は絵文書にも生起する。マドリッド絵文書の九〇から九三ページ上段にかけて、この文字は、七面鳥や鹿などをわなで捕えた図の上の文に生起している。ドレスデン絵文書の二三ページ中段では、神が奉納物を手にしている図の上のテキストに生起している(図65)。これらの場合、「わなで捕える。わなで捕えられた動物」というペッツの意味に合致している。

「歯痛の文字」は即位の文字に使われているが、ペッツにも、即位に関係する「人を高位につける」という意味がある。

このようにみると、ペッツのほうがホックの意味よりも、よりよく文字の生起例を説明できる。それゆえここでは、「歯痛の文字」をペッツと読んでおこう。

即位は、「歯痛の文字」のほか、いろいろな文字で表わされている。誕生の文字ほど共通に使われてはいないのである。即位の文字がいろいろあるということは、地方的、時代的な差のほか

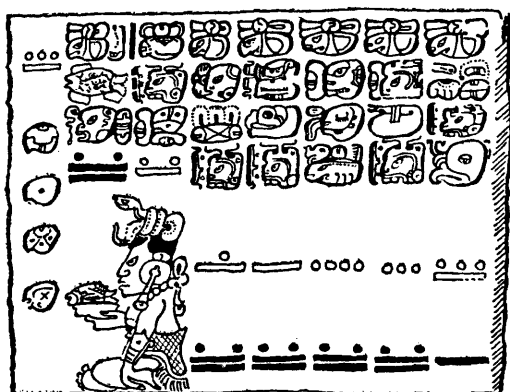


図65 ドレスデン絵文書23ページ中段

に、即位の形式とか、権力の質の違いとかいったものが反映しているためではないかと考えられる。たとえば、T644も即位の文字である(図64)。ベルリンは、T684とT644の使い分けは質の違いではないかと考えた。すなわち、T684はもっぱら俗権を、T644は神権を意味する可能性があることを示唆した。二つの権力の質の違いを裏づける証拠は、いまのところない。しかしなんらかの違いがあるから文字の違いとなって表われていることは、まちがいないであろう。その探求はこれからの課題である。

即位の文字と考えられるものにはいろいろな文字がある。そこでしばらく、即位に関する文字には、ほかにどのようなものがあるかを説明してみよう。

パレンケでは、T644は年の「着座の文字」と区別できない。だがよくみると、接尾字が違っている。

即位を表わす場合は、T246またはT178とT246が融合した接尾字がついている(図66)。T246がつくかつかないかで、意味が変わるといえることがで

即位の文字



T246

年の「着座
の文字」



図66



1



2

図67



1



2



3

図68

きる。

パレンケでは、即位を表わす文字がほかにもみつかっている。これらの文字は、よく知られているT684やT644とおなじ日付に使われていたことから、即位の文字と考えられたのである。図67に示したように、1と2の二つに大別できる。手と動物の頭を使って表わした1の三つは、少しずつ異なっている。なんらかの違いを表わしているのかもしれない。

ピエドラス・ネグラスでは、もっぱらT684が生起するが、T684に図68の1のような接字グループがつづいて、二つの文字で一つの句を作る場合がある(図68の3)。だがよく調べてみると、即位の記念日(たとえば二十周年)のときは、この接字グループのみが出来事を示すのに用いられている。それで、むしろこちらのほうが即位を示すのであって、T684は接字グループによって示される出来事を祝う儀式を表わすのではないかと、プロスクリアコフは推測している。

その接字グループは、T644と生起する場合もある(図68の2)。また融合する場合もある。

チラム・バラムの書では即位することを、「座につく」といい、クル(KUL)ということばが使われる。おそらく、T644はクルと読まれるにちがいない。

即位に関する文字は、誕生文字と違い、これからもほかにみつかる可能性が大きい。たくさんある即位に関する文字のそれぞれの正確な意味がわかれば、マヤの王朝史のなかでも重要な、即位の形態や状況などが理解されることになるろう。

女性標示文字

石碑にはスカートををはいて着飾った人物が登場するが、一九五〇年代まで、それらはすべて神官または神を表わすものと単純に片づけられていた。その大きな原因は、石碑は時を記すものであり、碑文には暦や天文、占や儀式的事柄が刻まれているにすぎない、と考えられていたからであった。

一九四六年、ボナンパックで壁画が発見され、女性が描かれていることは否定できなくなったが、それでもなお、石碑に描かれているのは歴史上の人物であり、女性が石碑にも登場することがあるということが確信されるまでには、一〇年以上の歳月が必要であった。つまり、プロスクリアコフの論文がでた一九六〇年以後のことであった。

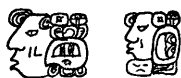
マヤの石碑に登場する人物像は、男女の性別を示す特徴が少ない。胸のふくらみなど女性をはっきり示す特徴がなく、また、男性もスカートをはいたり、美しく着飾っている場合があるので、描かれている人物像からだけでは女性の同定は困難なことが多い。

だが、女性的像には、それに付随するテキストのなかに、女性の横顔を描いた文字が現われる。それにより、人物が女性かどうか分かる。

女性を示す文字は女性の横顔を描いた文字で表わされるが、女性の横顔を描いた文字には、数1の神や月カヤップの守護神を表わす文字など、たくさんある。トンプソンは、『マヤ文字のカタログ』でT1000からT1002までのあいだに、じつに一三の女性の横顔を描いた文字を入れている。それゆえ、人物像の場合に男女の区別がつきにくいのおなじように、どれが女性標示文字であるのか区別がつきにくい。

だがそれも、ベルリンが女性を示す文字は次のような特徴をもつものとして、そのほかの女性の横顔を描いた文字と区別しえたので、解決した。その文字は一括してT1000Fと名づけられている。

- (1) 額の前に、巻き毛、または網目様の卵形の飾りをもつ。こめかみにもあることがある。
- (2) 耳の横に垂れ下がる髪房。
- (3) ほおにII印。



ピエドラス・ネグラス石碑 3



ナランホ石碑 24

図69



ボナンパック建物 1 の部屋 2

図70

頭飾り

テキスト



ピエドラス・ネグラス石碑 1

頭飾り

テキスト



クリーブランド石碑 1

図71

図69のように、女性標示文字が接頭字としてついている文字は、その女性の名を表わしている。女性標示文字は、紋章文字といっしょに生起することがよくある。たとえばボナンパックの建物1の部屋2の壁画に描かれている女性の頭上の文字枠には、女性標識 T1000F が生起し、ヤシュチランの紋章文字と結合している(図70)。この女性はヤシュチラン(出身)の女性ということがわかる。また図69のナランホの石碑24の場合は、女性の名のあとにティカルの紋章文字が生起していた。この場合も、この女性がティカル出身の女性ということがわかる。

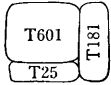
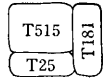


図72

リーブランド美術館の石碑1でも、頭飾りに名前を表わす文字があるが、そのうち一つはそのまま碑文中に現われている(図71の下例)。

女性を同定できる文字が発見されたおかげで、現在では約五〇の女性像が確認されている。そして文字や女性が登場する場面の考察から、女性の役割は大分理解されるようになってきた。

征服に関する文字

捕虜を捕えている場面にT515を主字とする文字が生起する。この文字は絵文書にもみられる。ただし絵文書では、T515はT601に換わっている(図72)。

ドレスデン絵文書の三ページに、チクチャン神とイグアナらしき動物の人物化された二体が、ともに縄で縛られている図が描かれている。その図の上にあるテキスト中に、T601を主字と

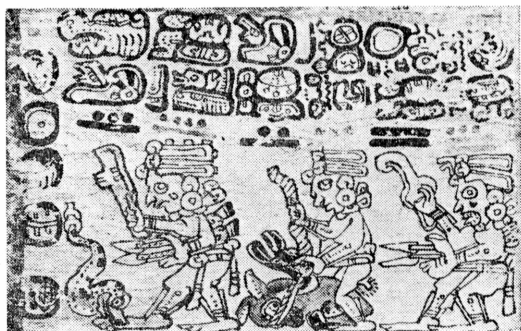


図73 マドリッド絵文書40ページ中段

する文字が生起する。その文字はクノロゾフにより、chu—ka—ah>chukahと読まれた。チュ(chu)は荷を表わす kuch(u)に使われており、kaとhaはランダが与えた音価であり、またchukには「捕える」という意味が『モトゥル辞典』にあることから、正しい読みといえる。

絵文書には神や動物が捕えられている場面がほかにもあるが、やはり、おなじ文字が生起している。マドリッド絵文書の四〇ページ中段では、神が鹿を捕えて縛っている場面に付随するテキストに、その文字がみられる(図73の人物の上の文字)。

このように、絵文書でも碑文でも、T515またはT601を主字とする文字の読み、意味はともに矛盾しない。「捕える」という意味に関連する文字として図74の文字がある。この文字を介して、捕える人と捕えられた人が生起する。捕える人をA、捕えられた人をBとし、この問題の文字をXとすると、次のような順序になる。

A—X—B
 ……(1)
 X—B—A
 ……(2)



図74 捕える人

ユカテコ語の修飾語と被修飾語の語順は、被修飾語——修飾語である。主語と補語の語順は、主語——補語でも、補語——主語でも、どちらでもとれる。先にあげた関係式といま述べた言語の構造を照しあわせると、Xは「捕える人」という意味をもつと推測できる。(1)ではAがBを捕えた人、(2)ではBを捕えた人がAということになる。

Xとおいた文字を主字とする文字は、二つの文字のあいだの関係を述べた文字ともみることができが、このような二者のあいだの関係を示す文字はほかにもある。

結婚を表わす文字

月ウオヤシップの一部に使われるT552も二者間の関係を示す文字である。この文字は、前世紀の終りに絵文書の研究ですぐれた業績をあげたフェルステマン以来、「結合」を表わす文字と考えられてきた。男性と女性を表わす文字が、この文字を介して生起するからである。T565も絵文書ではT552とおなじような構文をとり、フェルステマンは「性交」を表わす文字と考えた(図75)。T565の変体にはT552が接中字化されたものもあり、両者はひじょうに似た意味をもつと想像できる。男と女を表わす文字が、これらの文字を介してかならず生起するわけではないが、これらの文字を介して、ある文字とある文字が生起すること、すなわち、これらの文字がある種の交わりや関係を表わしていることはまちがいない。



T 552



T 565

図75 結婚を表わす文字



ティカルの女

ひげリス王

図76 ナランホ石碑23

私たちは暦の文字の研究から、T 552 がカット (Cut) と読めそうであることを知っている。これがなんとか役に立たないものであろうか。

図76は結婚を表わしていると考えられている節である。ナランホの「ひげリス王」とティカルの女性が結婚したことを記した節とみられている。

先にカットという読み方ができそうであるといったが、この場合にそれが適用できるか、辞書を見てみよう。ユカテコ語の『モトゥル辞典』にも、『サンフランシスコ辞典』にも、カットウイニックの項があり、「女性に結婚を乞う」という意味が記載されている。まさに私たちが望んでいた意味があるではないか。私たちが追求してきたことが正しいとすると、この節は「ひげリス王がティカルの女性をめとった」という意味になるであろう。

親族に関する文字

結婚ということばがでてきたので、それに関連して、親族語は

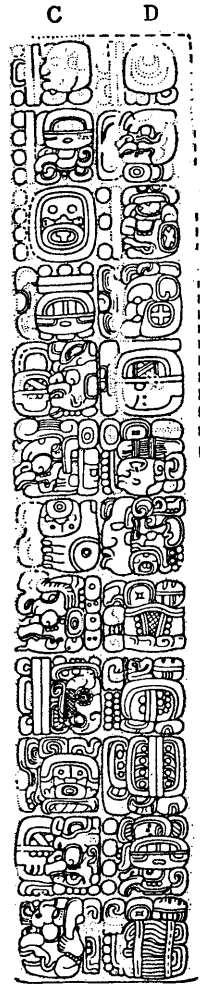


図77 ティカル石碑5
(W. Coe 画)

どうなのだろうかと気になってくる。父、母、子などを表わすことばがあるにちがいない。それと思われる文字をあげてみよう。

図77は、ティカルで七三四年に即位したB王に関する石碑5の一部である。ここで注目したのは、C7とC10の文字である。C7の次は女性標識があり、その女性の名がつづく。C10のほうは、B王の前任者のA王の名がそのうしろに生起している。構造を単純化すると、B王—C7—女性—C10—A王となる。A王はB王の父と考えられるので、女性はB王の母にちがいない。そうするとC7は母を表わす文字で、C10は父を表わす文字とみることができ。父と母を表わす文字であるのなら、マヤ諸語のなかのどれかの方言に、その文字を説明できることばがあってもよいはずである。

しかし現在の知識では、父と母にあたることばをあてはめて納得できるものはない。いまのと



図78 ヤシュチランのリンテル24 (I. Graham 画)

ころC7とC10の文字を母と父と読むことはできないが、少なくとも母と子、父と子の関係を表わす文字と考えてもよいであろう。これと相似構文は、神殿4のリンテル3のG5、H9や、神殿1のリンテル3などにある。テキストを分析するときはこの文字に出くわすことが多い。その

ときに、父—子、母—子の関係を表わすとみられる問題の文字は、またとりあげることになるであろう。

テキストを分析するとき頼りになる文字はほかにもあるが、それらは結局テキストを分析することで得られたものであるから、テキストを分析するとき述べることにして、最後に、儀式に關す



図79

る文字を二、三あげ、テキストの構造の考察にはいることにしよう。

儀式に関する文字



図80

ヤシュチランのリンテル24には、女性が舌に縄をとおした自己犠牲の図が描かれている(図78)。舌や耳に穴をあけて血を流したり、ペニスに穴をあけて血を流す儀式はよく行なわれていたようで、たとえばポナンパックの壁画やウエテナンゴの壺などに、それらの絵をみることがができる。十六世紀にその儀式がまだ残っていたことはランダムも記している。血は神に捧げるもののなかで、もっとも貴重でふさわしいものであったからだろう。

数ある犠牲儀式のなかで、それにあたる文字が同定されているのは、舌に穴をあける儀式を表わすものぐらいではなからうか。この儀式はマドリッド絵文書の九六ページにもでてくる。文字はヤシュチランのリンテル24にある文字とおなじである(図79)。

そのほかの儀式に関する文字を二、三列挙しておこう。

魚を握った文字は、蛇の口から人(神)がでている場面に生起する。プロスクリアコフは、先祖または神格化された人に関する儀式を表わす文字と考えている(図80の1)。

手から種または水が落ちてゐる文字は、文字が表わすとおり、人物が種または水をまいてゐる場面にでてくる（図80の2）。

図80の3は、死後に関することを表わす文字と考えられている。

テキストの構造

私たちは、これまでテキストを分析する際に役立つ文字のいくつかをみてきた。それらを頼りにして各遺跡のテキストに取りかかるまえに、テキストの構造について少し考えてみることにしよう。

マヤ文字のテキストの典型的な形は、まず日付があり、次にその日の説明として、出来事を示す文字（動詞）や、名前や称号を表わす文字、紋章文字などが生起し、それから次の日付の表記、その日の説明、とつづく形式である。そこで、日付から次の日付の前までを文と呼ぶことにしよう。

日付から次の日付までが長いと、いくつかの節に分割できる。すると、節を定義する必要が生ずるが、ここで節とは、日付——動詞——行為者——紋章文字といったような文字群をさすことにする。長い文での節の区切りは、紋章文字やバカブ文字といわれているものや、繰り返し現われる文字などからほとんどの場合わかる。



図81 ヤシュチランのリンテル8 (T. Proskouriakoff 画)

端の上から三番目の文字はチュカフと読め、「捕えた」という意味をもつ。その次の文字は、右の捕えられている人物のふとももの文字とおなじであり、その捕虜の名とみなすことができる。もちろん、町の名や種族名の可能性もあるが、ここでは名とみて問題ない。この捕虜は、プロス

節で問題になるのは、名詞が二つ並ぶ他動詞型の構造であろう。碑文では、動詞——名詞——名詞という順になるが、どちらが主語でどちらが目的語になるのかわからない。そこで、そのような例を提供するヤシュチランのリンテル8をみてみよう(図81)。

二人の王がそれぞれ捕虜をつかまえている。文字は三つの部分に分かれている。左上端の7イミシュ14セックという日付からはじまり、右上の文字につづいて一節を形成している。それはおなじ内容を扱ったリンテルがほかにもある(リンテル41)ことから、問題はな

日付の次は動詞である。先にみたように、左上



図82

クリアコフにより、「宝石頭蓋骨」と名づけられたので、私たちもそう呼ぶことにしよう。右上に移り、二番目の文字はヤシュチランの鳥ジャガーとあだ名されている王の名で、三番目はヤシュチランの紋章文字である。一番上の文字の説明を抜かしたが、これは鳥ジャガーに関係ある文字か、「宝石頭蓋骨」に關係する文字かわからなかったからである。しかし、この文字はほかのテキストから、捕虜に關係する文字であることがわかる。ヤシュチランの建物44の中央入口上側の、階段テキストの捕虜のさがりのなかに、図82のような文字が記されている。これはアハウという捕虜を表わしている。それゆえ捕虜に關する文字といえるのである。

図はヤシュチランの鳥ジャガー王が、ふとももに「宝石頭蓋骨」の文字を彫った人を捕えている。それと文字テキストから、このテキストは次のように分析でき、だいたいの意味は、「7イミシユ14セックの日に、ヤシュチランの鳥ジャガー王は「宝石頭蓋骨」を捕えた」となる。

この文章構造を略して示すと、T(時)——V(動詞)——O(目的語)——S(主語)となる(図83)。それではこの構造はマヤ諸語の構造とあっているのであろうか。

じつはマヤ諸語は、高地マヤ諸語と低地マヤ諸語とでは、構造を異にする。他動詞構文を簡単に示すと、高地マヤ諸語では(T)——V——S——O、低地マヤ諸語では(T)——V——O——Sとなる。

マヤ諸語はいわゆる抱合語に分類されている言語で、Vと書いた動詞は、正確に

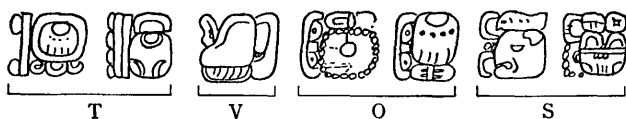


図83

例えば動詞ではなく、主語や目的語を代名詞で動詞に接辞化した複合物なのである。つまり、主語や目的語や時(相)などをもう一度代名詞でいわなければならぬ。この複合物をかりに動詞核と名づけると、この動詞核はあたかも一語のように発音される。つまり抱合するのである。

この動詞核は、いかえれば、文を成り立たすための義務要素であり、動詞核だけでも文は成り立つ。この動詞核の語順も、低地マヤ諸語と高地マヤ諸語では違うのであるが、その記述はここではあまり関係がないのでおいておくとして、文字との関係をまず述べると、次のようになる。動詞核は、一つの文字枠におさまった文字と符合する。文字の主字が動詞で、接字が人称代名詞や過去を表わす接辞にあたる。図83にあげたヤシュチランのテキストでいうと、動詞核は左から三番目の文字であり、その文字は、*chu—ka—ah*、つまり *chuk—ah* と読まれる。ユカテコ語では、*ah* は過去を示す接辞である。動詞は *chuk* (捕える) で、この場合、*chu—ka* と二つの音節文字素で書かれている。しかし、主語や目的語がない。この場合必要な三人称単数の主語は、*□* である。目的語は、三人称単数の場合、人称代名詞で表わす必要はない。つまり零要素(ϕ)である。例の場合、言語学的には、*u—chuk—ah—\phi* とならなければならない。ところが、この文字

には主語となる文字素がないので気にかかる。さらに、三人称の主語の E 、これは文字としてはT1で表わされ、よく現われるのだが、このT1(E)とT181(E)は、じつは相補分布なのである。それゆえ、T181を EPT と読むことまで正しいかどうか問題になってくる。実際、T181を EPT と読まない人がいる。この問題の解決は、T181の読み方ばかりでなく、文法的な問題に関してひじょうに重要な知見を与えることになると思われるが、このように言語学的に文字をみる人はあまりいない。

VのあとにはO、そしてSが生起していたが、この語順は、低地マヤ諸語の語順とおなじであり、高地マヤ諸語の語順とは逆である。

ここでも、三章の数字のところのみた結論とおなじ結論が得られた。すなわち、マヤ文字は低地マヤ諸語のことばで書かれたということである。だからといって、高地マヤ諸語を無視できるかという点、そうではない。暦の文字の解釈や上向きガエルの文字がポックと読まれたのは、高地マヤ諸語を知らなければできなかった。それゆえマヤ文字の解説には、マヤ諸語の広い知識が必要であることを再度ここで述べておく。

ヤシュチランのリンテル8の左右の文字についてはわかった。ではまん中の文字はどのように解釈できるのであろう。こちらは他動詞文ではなさそうである。というのも、最初に生起する文字は、先にみた、捕虜と捕える人の関係を述べた図74の文字である。二番目は左の捕えられてい

名詞句

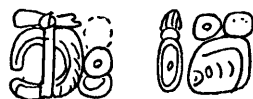


楯ジャガー王，アハウの征服者

動詞句



即位



即位

前置詞句



ヤシュチランて



東て

図84

る人物のふともにも彫られた文字で、三番目は紋章文字のようである。そうすると、四、五番目は左の捕えている人物を表わす文字とみることが出来る。つまりこのテキストは、左のひざまずいた人物（B）を捕えた人が、左側の立っている人（A）であることを表わしている。Bを捕えた人がAである、という補語文とみることが出来る。ヤシュチランのリン

テル8は、ほぼ完全に理解できた。残るは、捕えられた人がいったいこの人かということであるが、残念ながらその手がかりはない。

これまで、文(節)というものをみてきた。そしてテキストの構造は、ユカテコ語の構造とおなじであることがわかった。日付—説明文字群という型は、絵文書やスペイン人の征服期のチャム・バラムの書にもみられる。それゆえこの型は、古典期からスペイン人征服後、さらには現代まで一貫してつづいている、マヤ諸語の特徴といえる形式であることがわかる。

では、節というものがあるならば、句とはどういうものをさすのか。図84のような例をあげることができるので、みていただきたい。

さてここままで、マヤのテキストの一般的な構造を簡単に述べた。テキストには、日付しかない短いものもあるし、二〇〇を超す文字からなる長いものもある。それらはいま述べた、文、節、句に分割できるのである。

テキストの分析の方法

これでいちおう、マヤのテキストの説明を終った。あとは実際にテキストにあたるだけとなった。そこでその前に、テキストに取り組むための一般的方法をまとめておこう。

まず、日付の枠組を確認すること。それでテキストを文(節)に分けることができる。文は線

り返しのパターンや紋章文字などを頼りに、いくつかの節、句に細分できる。次に各々の節と日付との関係をはっきりさせること。一番よい方法は、日付を示し、その日の説明文字を線型に書きなおして記していくことである。

その次に、動詞や名詞の確認である。動詞はふつう日付のすぐあとにくる。だから日付のあとの文字を動詞とみて検討するのが賢明である。しかし、かならずしも日付のあとに動詞が生起するわけではない。だから動詞をみつけるのはむずかしい場合がある。これまでのところ動詞とみさせる目印は、T181しかない。もちろん、T181がつかない動詞があるだろう。もっとはつきり動詞と決めることができる目印がほしいところである。動詞の性質や意味の推定にはそれが生起する場面が手がかかりになることが多い。その典型的な例は、ヤシュチランのリンテル8である。動詞が音節的に書かれている場合や、表わしているものから意味や音価が決定できる場合もある。しかしながら、わかっている動詞はまだまだ少ない。

名詞の場合、名前や称号などを表わしていると考えられる。多くの場合、頭文字が使われているため、そしていくつかの文字がつながって生起するため、どれが名で、どれが称号かわからない場合が多い。ましてその読み方の決定となると、さらにむずかしい。

いまでは、だいたい動詞と名詞の区別はつくようになった。まだわからないものもあるが、区別がつくと、こんどは、それらの文字の意味や音価の推測に進んでいく。それには、関連する日

付や場面などを十分に活用しなければならぬ。さらに碑文の生起場所や状態、関連する石碑などの考察も忘れてはならない。その土地の碑ばかりでなく、近くの遺跡の碑や同時代の碑との比較、さらには全体の碑文中での使われ方の考慮など、広い視野に立って観察することも必要であろう。そうするうちに、同様な使われ方や変体などがわかり、文字の性格や意味の把握、さらには音価の決定と、研究は深まっていくであろう。

文字の表わしているものと意味や音価の符合が得られると、その文字は解読できたといえよう。文字の表わしているものがわかる場合や、文字が表音的構成になっている場合なら、解読できる可能性は大である。しかし、その絵文字的性格のため、意味しかわからない文字もあろう。さらに、意味さえわからない、私たちにどうしようもない文字が残るだろう。そう考えると、解読が終わったときとは、いくつの文字の意味と音価がわかり、いくつの文字の意味がわかり、意味も音価もわからない文字がいくつ残ったと、はっきりいえるときではなからうか。

現在、多くの遺跡のテキストの分析が進んできている。しかし、矛盾のない解読はまだ少ない。これから、その一面を知るため、そして文字からみたマヤ文明とはどんなものかを知るために、実際にテキストにあたっていくことにしよう。